

VII. 随想

温故知新

—Question, Strategy and paradigm shift for “REIWA”—

鶴 紀子（宮崎大学名誉教授）



かつて、鹿児島県の畏友 瀧川守国先生に頼まれて、Dr.Guilleminault,Cの宮崎観光の案内をした。大学のゲストハウスに宿泊して頂き、日南海岸から都井岬まで案内した。彼はフランス出身でJouvetの動向など、数々の話を伺い、その中でFuxe,K, Dahlström,Aらの素晴らしい仕事が話題になった。それらの仕事は彼らの先生に先見の明があり、夫々、新しい方法論のテーマを与えられたという。当時、Dahlströmのニューロンの中をドーパミンが流れる画像に目を見張るような思いをした。

その頃1982年、北海道でてんかん学会があり、山内俊雄先生がシンポジウムを開催され、その後「中枢神経実験法」が刊行された。臨床教室で、基礎実験を行うのが、当たり前で、嬉々として、実験に関わっていた。精神科医がてんかん学を通して脳の機能を知り、そのメカニズムについて思いを馳せ、イメージ化するのには病態生理解明には必須であろう。秋元波留夫先生と山内俊雄先生の「てんかん学の進歩」は当時の我々のマイルストーンであった。

思い返すと、昭和41年東大紛争がまさに始まった東京大学医学部付属病院本院でのインターンを終え、鹿児島に帰った年に朝倉哲彦先生がバンクーバーから帰られ、実験の手ほどきをうけた。有志の輪読会でPenfieldやRanson & Clarkなどを貪るように読んだ。更に岡山で開催されたGABA-GABOB研究会（脳研究会・脳科学会前身）にPenfield先生が見え、黒板にCentrencephalonなるシェーマを描かれたことも懐かしく思い出される。学園紛争直前の名古屋での精神神経学会で、先生から呈示されたテーマの一つがMirror focusでそれを博士論文テーマとして選択した。コバルトてんかんに行った薬理操作は実験手法としては簡便であったが、当時それを検証する術を持たなかった。このことは国際誌レベルの研究との差となる。

その後、Mirror focusを提唱したFrank Morrellの所で実験を行った。実験室の片隅でカエルを飼育する所から始まり、小さなカエルの脳を固定する装置を工作機械で作成し、電極を刺入し、刺激する。全て一からのスタートであった。当時の同僚だったHoepfner氏にはご自宅に招待して頂き、奥様にも大層お世話になった。因みにHoepfner氏には、当財団の外国人研究者招聘事業を受け、宮崎に来て頂いたことがある。昨年の米国てんかん学会出席のニューオーリンズ行きに際しても、シカゴのご自宅に招待して頂き、今でもお世話になっている。残念ながらMorrell夫妻は既に故人となっている。

シカゴから帰り、鹿児島大学から宮崎医科大学の発足に伴い、宮崎へUターンした。宮崎では初代池田暉親教授にお世話になった。宮崎医科大学付属病院がスタートする時期で、当時、予算もスペースも潤沢に使わせて頂いた（残念ながら池田先生も既に故人である）。イタリアのフィレンツェで1991年第5回世界生物学的精神医学会が開催された際に、シンポジウムが採択され、一族郎党を率いた若い先生と出かけた。学会場で、提供された弁当を芝生の上で食べていると、岡山の森昭胤先生がいらっしやっていた。フィレンツェの思い出としては、ウフツイ美術館で素晴らしい絵画に目を見張った。中でもラファエルの画風に魅了された。

その帰りにバりに寄り、フランス国立科学研究所（CNRS）（Gif-sur-Yvette）の Naquet先生の研究室を訪ねた。そこでは光過敏性を有すPapio Papioの実験を行っている際、動物が逃げ出すと、サーチライト

をパカパカさせて、それが木から落ちるのを待ったというjoke?が、去る昔、シカゴにいる頃、まことしやかに語られていた。先生は不在であったが、Dr. Le Gall La Salleが所内を案内してくれた。

無事フランス視察もすみ、本命のオルセー美術館に行き、モネの港を描いた絵の前で、白波などのタッチを絵に近寄ったり、離れたりしながら見入っていると、後ろから名を呼ばれた。驚いて振り返ると、2-3日前にフィレンツェでお会いした森先生だった。その後のオペラ通りの海鮮料理の味と共に、思い出される。

Neuroscienceの分野は今や広大である。基礎研究に情熱をかける人材育成が、向後の医学の発展に重要であろう。ペプチドの発見で、脳とこころの対話物質など、神経科学分野に限定されなくなって来ている。最重要課題としての「問いは何か」「方法は何か」に関し、研究者が日夜考え抜き、次世代の研究分野の開拓から「パラダイムシフト」につながる。

Penfieldの本は今も少しも色あせない。時代を超えて、伝えられる事実は、日常の臨床の場で、患者さんのこころの風景を忖度するのに有用な手段となる。

(2019年5月10日記)